

NewsLetter

創刊号 2009年2月

CONTENTS

特集記事

トピックス

活動状況

Feature Article

特集記事 1

P1 →

化学系を中心としたジャーナル 合同プロモーション



化学系パートナー誌を中心に、日本のジャーナルを海外の研究者に対し、宣伝した2年間の活動を報告します。

Feature Article

特集記事 2

P5 →

SPARC Japan 海外動向調査報告



物理系パートナー誌が2005年度から行っている海外動向調査に基づく現況を報告します。

Topics

トピックス 1

P7 →

SPARC Japan セミナー 2008 開催報告



学術コミュニケーション媒体としてのジャーナルに関わる、様々なトピックをテーマに開催しています。

Topics

トピックス 2

P9 →

SPARC Digital Repositories Meeting 2008 開催報告



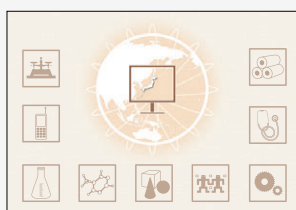
米国・ボルチモアにおいて SPARC Digital Repositories meeting を共同主催しました。

Activity report

活動状況

P10 →

パートナー誌からの報告／イベント



パートナー誌の最新状況と SPARC Japan 全体のイベント活動。

■ 化学系を中心としたジャーナル合同プロモーション 海外の研究者に日本のジャーナルの宣伝をした2年間の報告

● はじめに

インターネットのインフラがもたらした学術ジャーナルの電子化により、日本の学術ジャーナルもここ10年ほどは電子化、電子ジャーナル化が大きなトピックであったといえます。各学協会はいずれも各自の事情に合わせて自ジャーナルを電子化し、学会によっては新刊電子ジャーナルを発行してきたところもあります。また、国立情報学研究所(NII)の電子図書館(NII-ELS)、科学技術振興機構(JST)のJ-STAGE、日本学術振興会(学振)の科研費補助の電子ジャーナル対応(研究成果公開促進費)など、各種政府系団体が電子ジャーナル化を後押ししてきました。さらにNIIのSPARC Japanプロジェクトでは単なる電子化の枠を超えて日本発の国際的な学術情報流通を改善することをミッションに、これまで3年ごと2期の活動を行ってきました。その第2期後半に学協会合同でジャーナルを自主的に世界に宣伝するという、日本でも最初の試みといってよい活動を行ったことで、SPARC Japanレター誌初号の紙面を借りて紹介する機会をいただきました。

● 合同PRに至るまでのいきさつ

そもそも学術ジャーナルに宣伝(プロモーション、以下PRとする)は必要なのでしょうか?学術情報の事業は非営利性を追求するべきであって、良い情報であれば必ず誰かの目に留まって評価されるのだからPRは必要ないのではないかと考える層は未だ少なくありません。また、それは極めて正論であるし、それができるに越したことはありません。しかし現実に目を向けると、たとえば学術情報といえどもPRが分野を問わず必要であることがわかります。それを簡単に確認するには、それぞれの分野のインパクトファクター上位のジャーナルの活動を調査すればすむことです。特に、もしそのジャーナルの発行団体が学会であればその学会の年会・総会を訪れ、あるいは発行団体によらずその分野でもっとも重要な国際会議を訪れば一目瞭然です。各出版社がこぞって自ジャーナルの宣伝を行っています。PRは必要なのです。さらに言わせていただくなら、オープンアクセスジャーナルの先頭を行くPLOSジャーナルでさえPRの重要性を認識し、初期PRにDNA二重螺旋で有名なワトソン博士を起用したほどです。

では、なぜPRが必要なのでしょう。PRというと利用者への販売促進面に目が向きがちで、確かに巷で売られている生活用品などの場合は販売の目的がほとんどです。しかし、学術情報の場合は趣を異にします。PRは利用者である読者へはもちろん、著者へのPRなのです。良い原稿をもらうために良い雑誌であることをPRし読んでもらうのです。そして、著者の優良なコンテンツを掲載することで、結果的に購読にも結びつきます。コンテンツの生み手と利用者の層がほとんど同じであるという特殊性に従って、投稿者にPRすることが不可欠なのです。日本の学術出版では長い間この認識があまりありませんでした。あるいは認識はあっても具体的な活動に結びつきませんでした。その理由はさまざまでしょう。日本の学協会独特の非営利性、科研費出版補助の縛り、あるいはそもそも海外にPRするための費用不足など、要因を挙げればきりがありません。いずれにせよ、日本化学会は電子ジャーナル化と平行してコンテンツの改善にも取り組み、その一環としてPR活動が必要と認識し、2004年から中国やアメリカ向けを中心とした活動を開始しました。これがこの活動の発端ともいえます。

しかし、この日本化学会の活動は2年ほどしてある壁にぶつかります。それは少タイトルのハンデでした。海外の会議でブースを出展し始めてすぐに痛感したのですが、何十、何百というタイトルを一度に宣伝する欧米の出版社の出展と比べると、内容、見栄えどちらをとっても不利なのです。さらに、雑誌あたりのPR費用も考えると、改めて「数は力」としてプレゼンスを示せるだけでなく、また効率の良さを生み出すことを理解させられました。もっともこの数の差は予想もしており、その差を少しでも埋めるために、日本化学会は日本で製作販売しているHGS分子模型のPRとタイアップするなど、別の商材を組み合わせるという工夫を加えていました。そしてその一方で、本来のジャーナルの数をまとめて宣伝するメリットも生かそうと、他学会との連合、特に化学系の学会との連携を模索し始めました。

まず自助努力による合同PRの可能性を探るべく、2007年4月11日に「学会英文誌合同プロモーションを考える会」を開き、化学系の英文誌を発行している学協会に声をかけて、それまでの経験を基に合同PRの意義

と自主的参加を呼びかけました。しかしながら、各学会の反応はさまざまで、合同PRの意義を大筋では理解しながらも、各学協会の事情からすぐにPR活動に賛同、参加するところは多くありませんでした。特に、急に立ち上がったプロジェクト案ということもあって、予算措置の問題、すなわち、金銭的な面で参加が難しいことがわかりました。そこで、化学工学会を代表にSPARC化学系ジャーナルと日本化学会で合同PRを行う企画を興しました。折しも、SPARCの運営方針自体が単独の学会をサポートするよりは学協会合同の企画をサポートすることにシフトしていたこともあって、本企画が通りSPARC Japan化学系ジャーナルに対して一定の補助を得ることができました。

● 合同PRの内容

2007年に開始した合同PRについてご紹介します。主な活動はSPARC Japan選定誌の化学系ジャーナル5誌と日本化学会の2誌とで、海外向け投稿者PRのために、海外の主な国際会議にブースを出展しました。初期の参加ジャーナルは、日本化学会の2誌 (Bulletin of the Chemical Society of Japan、Chemistry Letters) とSPARC Japan選定誌の化学系5誌 (Analytical Sciences / 日本分析化学会、Bioscience, Biotechnology, and Biochemistry / 日本農芸化学会、Journal of Bioscience and Bioengineering / 日本生物工学会、Journal of Chemical Engineering of Japan / 化学工学会、Polymer Journal / 高分子学会) でした。

まず、2007年は、第41回 IUPAC World Chemistry Congress (国際純正・応用化学連合総合大会 / 2007年8月5～8日、イタリア・トリノ) と第234回 ACS National Meeting (米国化学会秋季大会 / 2007年8月20～22日、米国・ボストン) で合同PRを行いました (表1および

図1参照)。

海外の国際会議に参加する場合、出展の平均日数は3日程度です。ブースの標準サイズはおおよそ3 m×3 m、そこに参加ジャーナルの見本誌、パンフレット、ノベルティグッズ、その他SPARC Japanの総合パンフレット、SPARC Japanのポスターなどを展示します。化学系合同PR専用の合同カタログとポスター、参加ジャーナル共通のノベルティとして、参加ジャーナル名の入った竹のうちわも製作し、現地で配布しました。このうちわに関しては、各自学会の自己負担で作成し、少ない額ながらもこれらの参加学会にてPRを目的とした事業が執行されたこととなります。

ブースは、日本と違って四角いスペースのみが提供される場合が多く、ブースとしての体裁やデコレーションは各団体が一からすべて行うか、お仕着せのキットをレンタルすることになります。PRのため現地に出張する担当者2から3名で会場の設営から、会議の参加者への説明、宣伝、撤収までのすべてをこなします。おおよそ5日間の仕事となり、欧米の場合は移動日が2日加わりだいたい1週間の出張となります。

図1：最初の合同PRとなった第41回IUPAC World Chemistry Congressの展示



表1：合同プロモーション出展国際会議

出展会議名	開催場所(国名)	マーケット	展示期間	参加人数	出展ブース数
第41回 IUPAC World Chemistry Congress (国際純正・応用化学連合総合大会)	トリノ (イタリア)	ヨーロッパ	2007年 8月 5～8日	約1,200	6
第234回 ACS National Meeting (米国化学会秋季大会)	ボストン (アメリカ)	北米	2007年 8月20～22日	約15,000	436
SLA2008 (米国専門図書館協会年次総会)	シアトル (アメリカ)	アメリカを中心とした全世界	2008年 6月15～18日	5,011	282
中国化学会第26回学術年会	天津 (中国)	中国	2008年 7月13～16日	約2,300	37
第236回 ACS National Meeting (米国化学会秋季大会)	フィラデルフィア (アメリカ)	北米	2008年 8月17～19日	13,805	545
第2回 EuCheMS Chemistry Congress (ヨーロッパ化学会議)	トリノ (イタリア)	ヨーロッパ	2008年 9月16～19日	約2,000	27

会場で配布できる見本誌は会議開催中の3日間で100冊程度、パンフレットは500部程度です。ブースに訪れる会議の参加者にパンフレットを配布しながら、さまざまな質問に答えます。興味の中心は、インパクトファクター、電子投稿の有無、審査期間などです。その他は投稿資格、出版にかかる費用、会員になる方法、等々です。

2007年のアメリカ化学学会でのPRが終了後、10月10日には参加学会を集めて報告会と反省会を行いました。各展示内容と反応について報告を行い、合同PRの意義と継続を再確認した後に、来年に向けた改善案について協議しました。

2年目の2008年になると化学系合同PRに、新たにTrends in Glycoscience and Glycotechnology (フォーラム：糖質の時代がやってきた)が参加し、7学協会8雑誌のプロジェクトとなりました。さらに2007年のPRは欧州と北米のみでしたが、2008年には中国でのPRも実現し、アジアを加えた欧・米・亜三極の主要マーケットでPRを展開することができました。この初めてのアジアPRである中国化学会第26回学術年会(2008年7月13～16日、中国・天津)に加えて、第236回 ACS National Meeting



図2：化学系では最大規模のアメリカ化学学会秋季年会の展示



図3：2008年化学系合同プロモーション参加の雑誌群
(PR用うちわの裏面に同様のものを印刷)

(米国化学学会秋季大会／2008年8月17～19日、米国・フィラデルフィア)、そして第2回 EuCheMS Chemistry Congress (ヨーロッパ化学会議／2008年9月16～19日、イタリア・トリノ)と参加しました(表1および図2参照)。また、中国化学会では日本分析化学会の高島氏がSPARC Japanパートナー誌のスタッフとして初めて直接PR活動を行いました。

2008年のPRでもう一つ特記すべきことは、ジャーナルの分野を超えた「科学」のくくりでPRを行ったことです。また、この活動は新たな観点のPRともなりました、すなわち海外図書館へのPRです。先の著者向けから、軸足を図書館向けに変えたのです。これは分野が多岐に渡ること著者向けにはアピールしにくいという理由に加え、将来的に日本発のジャーナル群としてパッケージに相当するようなサービスが可能かどうかをみるためでした。そこで、SPARC Japan選定誌を中心にSLA2008(米国専門図書館協会年次総会／2008年6月15～18日、米国・シアトル)に参加しました(表1および図3参照)。SPARC Japan選定誌代表として、日本動物学会の永井氏が会場でPR活動を行いました。化学系合同PRより参加ジャーナルが多いため、会場での反応にはより手ごたえが感じられました。また、SLAのマーケットの性質上、経済や法律系のライブラリアンとのコミュニケーションが取れ、特許に絡む案件で日本の学術論文を見ることがある(がどこを見ればよいかわからない)という、少ないながらもニーズがあることがわかりました。



図4：SLAでの展示の様子
(飾るジャーナルが多い分、装飾がシンプルでもインパクトが出ている点に注目)

● 合同PRの考察

日本の学協会発行の論文誌の多くは電子化され、海外からのアクセスも投稿論文も増えつつあります。しかし、PRの現場で聞く声は、「日本のジャーナルについてもっと

と情報がほしい」というものでした。海外の研究者にとっても、図書館員にとっても、まだ日本の学術情報は情報をどこから得たらよいのかわからないものです。それに比べ、海外の出版社は営利、非営利を問わず定期的に出版し、広報も重要な活動と位置づけられています。ちなみに、このようなPR活動によって購読数など具体的な数字が実際増えるのかといった直接的な成果を求める声もよく挙げられますが、日本分析化学会や日本化学会で中国へのPR後に中国からの投稿が若干増えるといった傾向を見ることができた程度で、数字の上では顕著な成果を見ることはできませんでした。この点をイギリス化学会に率直に伺ってみたところ、彼らも具体的な数値目標があって（出版）PR活動を行っているわけではなく、常にPRし続けることで、その存在（プレゼンス）を示すことが大事であるとのことでした。また、常に新しい宣伝材料を用意することも大事であり、その上で、継続的なPR活動を事業予算として取り込んでいるのです。

この2年間のPR活動で得ることができたことの一つは、この内外の差を目の当たりにしたことです。いままでの日本の学術出版には、PRという点が欠けていたことを改めて強調しつつ、この現状を正しく認識し、ジャーナルが海外の研究者および図書館員の目に触れるために継続的な努力を続ける必要があります。また、少ないながらも学協会スタッフが現地を訪れ海外の研究者の生の声に触れられたことも大きな経験です。当たり前ではありますが、自ら海外に出向かなければ海外の本当の様子は掴めませんし、それがわかっているからこそ欧米のスタッフは日本にも足しげく通ってくるのです。日本発の情報発信が真の国際化を目指すのであれば、海外マーケットの反応は肌身で感じる体制にしておくことは不可欠とも言え、今後もこのような機会が継続的に学協会スタッフに与えられることが期待されます。

なお、このPR活動は副次的な効果も生み出しました。それは、化学以外の分野の学協会にもPRの意識が浸透したことです。2007年の化学系合同PRの一定の成功を受けて、2008年からは物理系、情報系、医学系など分野を問わず多くの学協会が国際会議でのPR企画を立ち上げ、そのいくつかはSPARC Japanの補助を得て活動を行っているか、近々に行う予定です。

● 実際の今後の活動のために

しかしながら、日本の学協会がPR活動を続けていくには大きな問題が依然として二つ残っています。一つ目

はPR活動のための予算確保です。日本の多くの学術出版は欧米と異なり学術ジャーナル発行で利益を得ることが難しく、科研費の出版補助に頼っているところも少なくありません。さらに、電子ジャーナルで課金を行っているジャーナルも全体的に見ればまだ少なく、ジャーナルをビジネスとして確立できていないので、結果としてPRのための予算を確保する余地がないのです。二つ目はスケールメリットの問題です。このようなPR活動はジャーナル単体ごと個別にできることではなく、もしくはできても大変非効率的ですので、今回のような学協会連合のスケールメリットを生かした取り組みが望まれます。さらに申し上げれば、化学系など分野別にパッケージ化したほうがPRの観点だけから見れば効率が良いのですが、それが難しいことがこれまでの学協会間の対話で判明しています。そのために、各個別の活動ごとに学協会の連携を取るという事態になっており、常に連携が崩れるリスクを内包しながらPRを進めていくことになっているのが現状です。実際に今回の参加学会の一つである高分子学会は、2010年以降商業出版者のNature Publishing Groupに委託を開始することがアナウンスされ、今後どのように連携を行っていくかが不透明になっています。

以上、合同PRを定常化するための、予算および人員の確保と長期的かつ安定的な提携体制の維持など大きな問題も横たわっています。これらは簡単に解決できる問題ではありませんが、冒頭で述べたPRの重要性を常に認識しながら今後も日本発の学術情報発信の向上に向けて様々な活動を展開できればと考えています。

謝辞

本活動にあたっては、丸善（株）に事前準備と展示期間の設営等にご協力いただきました。また、本活動に理解を示し参加いただいた各学協会の関係者と、本活動を全面的にサポートしていただいたNIIのSPARC Japanおよび同事務局に謝意を表します。

山下 和子（やました かずこ／化学工学会）

林 和弘（はやし かずひろ／日本化学会・国際学術情報流通基盤整備事業運営委員）

※ 参考情報

【化学会のPR活動について】

林 和弘、太田 暉人、小川 桂一郎

「電子ジャーナル事業の確立と課題：日本化学会の取り組み」（情報の科学と技術／2006, 56, 4, 2006, 188-192.）

【SLA出展の報告について】

<http://www.ndl.go.jp/jp/publication/biblos/2008/fall/02.html>

■ SPARC Japan 海外動向調査報告 － STM出版の最新トピックス

2005年度からSPARC Japanのご支援により海外動向を調査しました。参加した大会やカンファレンスは、次の3つです。

- Online Information
- STM セミナー&カンファレンス
- CrossRef

個々の調査については詳細な報告書を提出しており、この調査が、少しでも皆様のお役に立てば幸いです。

● Online Information

毎年12月上旬頃、ロンドンのオリンピア・グラウンドホールを会場に開催されます。カンファレンスと展示があり、カンファレンスの参加者数は約40ヶ国から900名程度で、STM出版社や代理店が展開する電子ジャーナルシステムの最新情報や業界の動向を手取り早く把握する場として有効です。

2007年の主なテーマは検索でした。特に、米英の主要な理工系学会が協力してサービスを開始したScitopiaについての講演と、Googleに代表される商業ベースの検索サイトの問題点についての講演は非常に興味深いものがありました。また、展示会では、230社近くが出展しており、Elsevierに代表される欧米の商業出版社や、AIP (American Institute of Physics) のScitationなど主要学会によるオンラインサービスの宣伝が目立ちました。

1. Scitopia

Googleに代表される商業検索サイトやElsevierに代表される商業出版社に対抗するため、2006年2月に米英の理工系主要学会が共同で検索ポータルscitopia.orgを立ち上げました。2009年現在、参加学会は、IEEEやAPS (American Physical Society) など19学会です。この背景として次の2点が考えられます。

- ① Googleなどの商業検索サイトでは検索結果に「ジャンク論文」も多いのに対し、Scitopiaはpeer reviewされた質の高いコンテンツに絞った検索ポータルです。
- ② 参加している学会だけで、米国の特許文書に引用されている文献の60%以上を占め、特許の観点から見ても、Scitopiaの横断検索は極めて有用です。

2. Scitation

AIPは自らのジャーナルよりも、『Scitation』というオンラインジャーナルのホスティングサービスを前面に出してアピールしています。AjaxなどWeb2.0技術を活用し、利用者の操作性を大幅に向上させています。商業出版社は学会の出版業務すべてを取り込むべく宣伝していますが、AIPやIOP (Institute of Physics) などの米英学会は、オンラインジャーナルのホスティングだけを取り込むビジネスモデルを推進しています。

● STMセミナー&カンファレンス

STMは、世界で100近いSTM (Scientific, Technical and Medical) 出版社の集まりです。近年は業界の急激な変化 (特にEU圏のオープンアクセス運動) に沿って新たな委員会がいくつか新設され、活動を強化しています。

1. STMセミナー

毎年12月上旬、ロンドンで開催されます。参加者数は40～60名程度で2日間に渡り、E-ProductionとInnovationsの2つのセミナーが開催されました。前者はジャーナル制作に的を絞ったものであり、後者は今後の動向を探るものです。

- E-Production Seminarの最近の主な話題はコンテンツマネジメントとアウトソーシングです。電子化時代のコンテンツマネジメントについての講演は、特にバックファイル電子化における問題点を提起していて、非常に興味深いものがありました。
- Innovations Seminarの最近の主な話題はWeb2.0への対応と著者識別です。欧米では、Web2.0を強く意識したオンラインサービスへのシフトが本格的に始まっています。

2. STMカンファレンス

毎年春と秋の2回、フランクフルトで開催されます。出版のマネジメント、マーケティングに集中したテーマで講演とパネルがあり、特に秋は10月上旬のFrankfurt Book Fairの前ということで、300名近い参加者で盛況です。尚このカンファレンスで配布するために持参したSPARC Japanのパンフレットは好評で、午前中のブレイ



ドイツ・フランクフルト市内広場

クまでに残らず無くなりました。

2006年春の大会では、中国の情報が紹介されました。米国のPhD (in science and technology) 所有者の7.5%は、中国国籍で、その25%が帰国しているとのこと。中国の研究者にとって英文論文の投稿の障害の理由は次の通りです。英語で書くことの困難さ(48%)。出版社とのコミュニケーションの困難さ(36%)。出版プロセスをもっと分かりやすく説明して欲し(56%)となっています。IOPP (Institute of Physics Publishing)によると中国からの不採択率は80～90%とのこと。

オープンアクセス(OA)については、出版社のOA対応状況のデータが揃ってきており、分野によってはoptional OAが定着しつつあるように見えます。この3年間で、OAの是非に関する一部の研究者、図書館と出版社との感情的な議論が終息し、研究情報の流通の各段階におけるコストの分析と、それをいかに負担するか、という冷静で現実的な報告が現れてきています。

2008年には、“The Real Cost – Communicating the results of research: how much does it cost, and who pays?”と題して、英国において学術情報制作・流通のプロセス毎の費用をRIN (Research Information Network)により調査・分析された結果が報告されました。詳細な原典は、以下に公開されています。コストに関するこれまでに無く網羅的で優れた分析です。

(<http://www.rin.ac.uk/costs-funding-flows>)

3. STM Board Meeting

OA問題、British Library対応、EUからの問い合わせ、digital copyrightへの取り組みなど、新しい動きに対する対応に忙しい状況です。最近の彼らの地域的な関心は中国であり、訓練セミナーなど種々の働きかけを通じて仲間に取り込もうとしています。日本への関心が無い

ことは寂しい限りです。また、商業出版社からの参加者が多く、学会系の参加者との均衡が必要であることを痛感しました。

訓練セミナーについては、周到的な企画と準備に感心しました。北米におけるMaster ClassとIntensive Journal Courseが企画され、アジアでも2008年2月に香港でアジアで初めてのSTM Intensive Journal Courseが開催されました。東京での開催も検討されましたが、参加者数が期待できないことと、東京のコストが高いことから、延期されています。

● CrossRef

1999年に欧米の主要出版社が、引用論文から全文へのリンク・システムを開発するために発足しました。例年11月にAnnual Meeting及びTechnical Meetingが開催されます。

2006年ごろから、これまでのレファレンスリンクを張る仕組みを提供するという役割から、集まったメタデータを如何に利用するか主眼が移りつつあり、Web 2.0を意識した方向性が見受けられます。著者同定、盗作論文の抽出(CrossCheck)なども話題となってきました。また、機関リポジトリに対しても指針を出しています。

CrossCheckは、原文とCrossRefのデータベースにある公開論文の全文との重なりを検出するものです。検出結果として、類似度XX%との表示が出て、該当論文のデータも表示されます。実際の論文を使ってみないと具体的な評価は難しいですが、十分に実用に耐えるという感触を得ました。既にAPS、AIPを始めとする学会やSpringer、Elsevier、Wiley-Blackwell等の多くの商業出版社がメンバーとして参加しています。

この調査を通じて、日本では入手しにくいSTM出版の最新トピックに数多く触れることができました。とりわけ欧米の出版社や図書館による時代の変化についていくための努力は目を見張るものがあり、その雰囲気を実感できる貴重な機会でした。このような機会を与えてくれたSPARC Japanに改めて感謝いたします。

鈴木 英則(すずき ひでのり/
日本物理学会 応用物理学会 物理系学術誌刊行センター)

※ 詳しい報告書をSPARC Japanのサイトで公開しています。
(<http://www.nii.ac.jp/sparc/publications/>)

■ SPARC Japan セミナー 2008 開催報告

2008年度のSPARC Japan セミナーは9回に渡り開催され、学術コミュニケーション媒体としてのジャーナルにかかわる様々なトピックについての講演がありました。

それに基づき活発な議論もおこなわれ、分野を越えて問題意識を共有できた有意義な1年だったと思います。参加者は学協会、大学、企業と多岐にわたっています。

第1回	2008年 4月22日	研究成果発表の手段としての学術誌の将来	(参加：86名)
第2回	2008年 6月24日	学術出版とXML対応 - 日本の課題	(参加：83名)
第3回	2008年 7月10日	韓国コンソーシアム事情 - 海外展開を目指して	(参加：41名)
第4回	2008年 9月2日・3日	紀要の電子化と周辺の話題【京都大学数理解析研究所研究集会との共催】	(参加：43名)
第5回	2008年10月14日	日本における最適なオープンアクセスとは何か？[Open Access Day 特別セミナー]	(参加：90名)
第6回	2008年11月25日	I Fを越えて - さらなる研究評価の在り方を考える	(参加：61名)
第7回	2008年11月27日	Open Access Update【図書館総合展・学術情報オープンサミット2008フォーラム】	(参加：80名)
第8回	2008年12月16日	日本で使える電子ジャーナルプラットフォーム	(参加：75名)
第9回	2009年 2月13日	SPARC Japan選定誌がやってきたこと	

● 第1回

研究成果発表の手段としての学術誌の将来

まずスタートとして選んだテーマは「学術誌は今後も存在していくのか」という大きな問題。総論としての講演を土屋俊教授（千葉大）にお願いし、各論として数学と物理の分野から行木孝夫助教（北海道大）、植田憲一教授（電気通信大）にそれぞれお願いしました。土屋教授からは、電子ジャーナルの登場によって、従来の冊子体のジャーナルがどのように変わっていくのか、また、研究成果を論文という形で表現し雑誌という形態で刊行することが果たして必然的なことなのかどうかについてお話いただきました。行木助教からは数学系を含む基礎科学論文の過去、現在、未来について語っていただき、植田教授からは、プレプリントの果たす役割、ピアレビューの多様化、オープンアクセスなどについてのお話がありました。

● 第2回

学術出版とXML対応 - 日本の課題

2007年11月に行われたXML出版についてのセミナーに引き続き、今回はXML作成の専門家からみた電子ジャーナル出版事業について学びました。講師に、デジタルコミュニケーションズの福重青史氏、物理系学術誌刊行センターの太宰達三氏、日本化学会の林和弘氏を迎え、メタデータがどのように作成されているか等、電子ジャーナル出版事業について講演していただきました。



第2回 SPARC Japan Seminarの様子

● 第3回

韓国コンソーシアム事情 - 海外展開を目指して

韓国科学技術情報研究院のChoi, Ho Nam氏をお招きして、韓国コンソーシアムについてのお話を伺いました。Choi氏は韓国科学技術大学で海外電子ジャーナルのコンソーシアムを初めて立ち上げ、現在は、国内外のコンテンツ総合サービスのチーム長として活躍されています。電子ジャーナルの認知度を向上させ、販売拡大につなげるためのノウハウを学ぶよい機会になりました。

● 第4回

紀要の電子化と周辺の話題

京都大学数理解析研究所で毎年行われている研究集会との共催で、2日間に渡り、下記のようなバラエティに

富んだトピックが取り上げられました。(敬称略)

- ・オープンアクセスをめぐる最近の動向：
三根慎二（名古屋大学附属図書館研究開発室）
- ・Amazon.co.jpのランキングのモデルとロングテールの分析：服部哲弥（東北大学大学院理学研究科）
- ・引用統計：小田忠雄（東北大学名誉教授）
- ・SPARC Japanとコンテンツ事業：
尾城孝一（国立情報学研究所）
- ・国内の数学関連ジャーナル類の発行状況：
行木孝夫（北海道大学大学院理学研究院）
- ・Journal of the Mathematical Society of Japanの電子化における数式：戸瀬信之（慶応義塾大学経済学部）
- ・数式検索システムの実用化に向けて：
橋本英樹（大阪大学基礎工学研究科）
- ・化学系電子ジャーナルから見た紀要の電子化：
林和弘（日本化学会）

● 第5回

日本における最適なオープンアクセスとは何か？

世界初のOpen Access Day（2008年10月14日）にちなみ、オープンアクセスについてセミナーを開催しました。講演者とテーマは下記の通りです。(敬称略)

- ・オープンアクセスの神話と真実：
永井裕子（日本動物学会）
- ・国立大学図書館からみた機関リポジトリの4年間：
富田健市（東京工業大学研究情報部情報図書館）
- ・「埋もれた研究成果を投稿・共有するサイト：My Open Archive」をやってきたこと：
坂東慶太（My Open Archive）
- ・誰が、何を読んでいるのか - アクセスログに基づく機関リポジトリの利用実態：佐藤翔（筑波大学）

● 第6回

IFを越えて - さらなる研究評価の在り方を考える

過去40年以上に渡りジャーナルの評価基準となってきたインパクトファクター（IF）ですが、IF以外の評価基準を模索する新たな試みが始まっています。その新しい取り組みとして、オックスフォード大学出版局のMartin Richardson氏を迎え、2007年に設立されたThe Usage Factor Projectについて講演いただき、またワシントン大学のJevin West氏にはEigenfactorについて語っていただきました。日本の取り組みとしては、根岸正光教授（国立情報学研究所）から、「研究評価・雑誌評価のた

めのビブリオメトリックス指標：現状と課題」についての講演がありました。

● 第7回

Open Access Update

会場をパシフィコ横浜に移し、図書館総合展の一環としてセミナーを開きました。世界で始めてオープンアクセスの試みを始めた出版社のひとつであるオックスフォード大学出版局のMartin Richardson氏に、著者負担モデルの一例をあげながら、オープンアクセスモデルの多様化について講演いただき、日本化学会の林和弘氏には、学協会出版を中心にした日本のオープンアクセスの取り組み、及び、日本と欧米との認識の相違などについてお話をいただきました。

● 第8回

日本で使える電子ジャーナルプラットフォーム

物質・材料研究機構の谷藤幹子氏に、電子ジャーナルに関わってきたこれまでの様々な経験を通して、生産者・仲介者・利用者の立場で、学術プラットフォームへの期待を述べていただき、科学技術振興機構の久保田壮一氏からは、J-STAGEの現状報告と今後のシステムの構想を紹介いただきました。また、電子出版の出現によって利用者の行動を把握できるようになり、図書館や購読者にとって低価格での購入が可能になってきた状況の中で、機能やコストなどの観点から、日本で導入可能な海外のプラットフォームの紹介としてAtypon SystemsのChris Beckett氏、Publishing TechnologyのLouise Tutton氏からそれぞれお話をお聞きしました。

● 第9回

SPARC Japan選定誌がやってきたこと

SPARC Japan第2期事業（2006～2008）の総まとめとして、寿山正博氏（日本機械学会）、二階堂紀子氏（電子情報通信学会）、鈴木英則氏（物理系学術誌刊行センター）、永井裕子氏（日本動物学会）から、これまでの活動報告と今後の課題や展望についての話しがありました。また、後半のパネルディスカッションでは、会場を交えた活発な議論がおこなわれました。

下越 弘子
(しもこし ひろこ／日本数学会・SPARC Japanセミナー実行委員)

■ SPARC Digital Repositories Meeting 2008 開催報告

SPARC、SPARC Europe、SPARC Japan（国立情報学研究所）3者の共同主催により、SPARC Digital Repositories Meeting 2008（2008年11月17日～18日）がアメリカ合衆国メリーランド州ボルチモアにおいて開催されました。SPARCによる機関リポジトリ関連の会議は、2004年11月の第1回会議以来2回目の開催で、SPARC議長のHeather Joseph氏から「3者が揃って開催できたこと、多くの参加者が世界中から集まったことが素晴らしい」という挨拶が、会議冒頭で述べられました。

SPARC Japanとしては、企画段階からプログラム委員としての協力、経費5,000ドルの拠出など積極的に協力しております。また、日本からは国公私立大学図書館協力委員会が後援機関となりました。

参加者は、アメリカ、カナダの大学図書館員を中心に、ドイツ、イギリス、ベルギー、スウェーデン、インド、シンガポール等から340名ほどの参加があり、日本からはNII関係者、NIIのCSI委託事業（機関リポジトリ）を受託している大学図書館関係者計10名が参加しました。

プログラムでは、新たな展望、大学の出版戦略、付加価値サービスの開発、ポリシーの状況という4つの重要テーマが設定され、それぞれ3名ずつの発表と質疑応答により議論を掘り下げました。日本からは、金沢大学・内島課長が付加価値サービスの開発で、CSI委託事業のプロジェクトの一つであるデジタルリポジトリ連合（DRF）の取組を発表しました。

ポリシーの状況では、千葉大学・土屋教授がSPARC Japanの立場から日本のオープンアクセスの状況を4年前と現在の比較において述べ、将来的な展望を示しました。

新たな技術・戦略とアプローチに重点を置くイノベーションフェアでは、筑波大学・金藤氏がSCPJ（学協会著作権ポリシーデータベース）について発表しました。「日本では、研究者にオープンアクセスの説明をしても『なにそれ?』と言われることが多い」というくだりで会場から笑いが起こったのは、参加者が所属する機関においても、同じような状況があるからだと思われます。

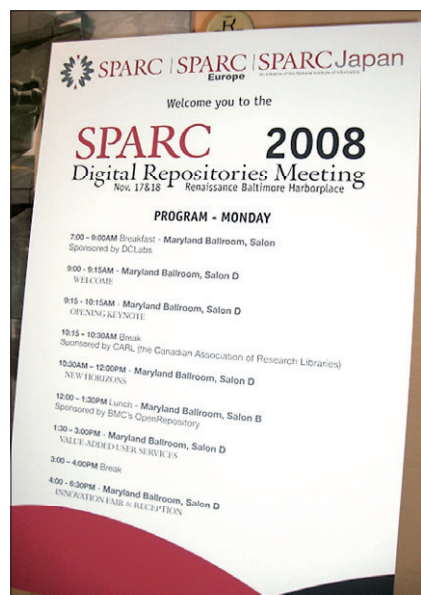
2日目のLuncheon Keynoteでは、NII・安達教授がSPARC Japanの活動やNIIの機関リポジトリ支援事業についての紹介後、NIHパブリックアクセス方針義務化実現の立役者である講演者（Bob Witech氏）の紹介を行いました。

2日間を締めくくるClosing Remarksでは、NII・根岸教授（SPARC Japan 運営委員長）が今回の会議の成功を祝するとともに今後に向けた展望を述べ、盛況のうち終了しました。

杉田 いづみ
（すぎた いづみ／国立情報学研究所）



左から Richard Johnson氏（SPARCシニア・アドバイザー）、
根岸 正光 教授（SPARC Japan 運営委員長）、David Prosser氏（SPARC Europeディレクター）、
Heather Joseph氏（SPARC エグゼクティブ・ディレクター）、
安達 淳 教授（国立情報学研究所 学術基盤推進部長）

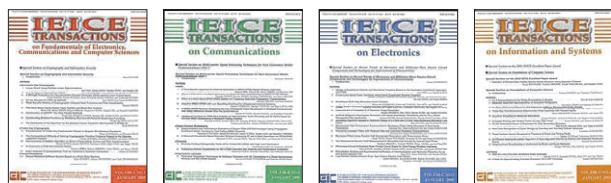


■ 活動状況 [パートナー誌からの報告]

● IEICE Transactions

(社団法人 電子情報通信学会)

SPARC Japan 選定誌である英文誌4誌について、国内においては 国立大学図書館協会及び公私立大学図書館コンソーシアムに対し割引価格の適用も含めた提案を行い、オンライン版購読の勧誘を行いました。また、海外に対しては、SPARC Japan の支援により国際会議に出席し積極的に周知・購読契約の拡大に努めました。



IEICE Transactions パッケージ



● Journal of Chemical Engineering of Japan

(社団法人 化学工学会)

社団法人化学工学会発行の Journal of Chemical Engineering of Japan、化学工学論文集、化学工学の3誌を SCEJ パッケージとして、大学図書館向けに割引価格での購読契約を行っています。Journal of Chemical Engineering of Japan と化学工学論文集はオンライン版での提供です。オプションで合本の冊子版を年3回発行します。冊子は年に3回発行の合本をオプションで販売します。化学工学は冊子版のみで発行。

(問い合わせ先: 03-3943-3527/online_journal@scej.org)

SCEJ パッケージ



● UniBio Press (NPO 法人 UniBio Press)

UniBio Press は日本の生物系6学会による、「電子ジャーナルパッケージ」として、日本で唯一の存在です。海外図書館購読を実現しています。参加学会は随時受け付け中です。もはや、デジタル化だけで、ジャーナルの存在を世界へ知らせることは不可能です。購読契約後、どのようにOAを活用するか、それが、今後の課題です。



UniBio Press (6誌)

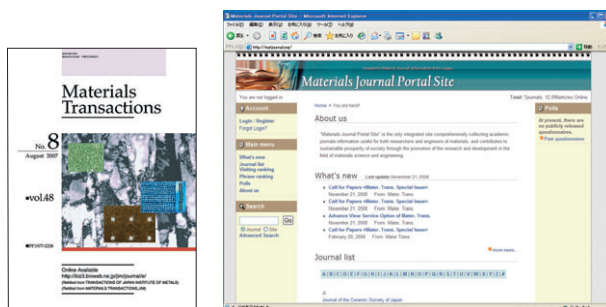
● Materials Transactions

(社団法人 日本金属学会ほか10学協会による共同刊行)

本誌の本年度特記事項は以下の2点です。

- 1) 国立大学図書館協会および公私立大学図書館コンソーシアムに対して購読機関数に応じた割引価格を適用するコンソーシア購読契約勧誘の実施。
- 2) SPARC Japan 参加の本誌および Polymer Journal 等材料系5誌登載の国内初の分野別ポータルサイトで登録論文数約12,000件、月間平均アクセス数約116,000件、登録ユーザー数約370名達成。

図書館での機関購読とポータルサイトのご活用をお願いします。(http://matjournal.org/)



■ 活動状況 [イベント]

2008年	
4月22日	SPARC Japanセミナー 2008 第1回「研究成果発表の手段としての学術誌の将来」開催
6月15日～18日	SLA2008 (米国専門図書館協会年次総会) 出展
6月24日	SPARC Japanセミナー 2008 第2回「学術出版とXML対応 - 日本の課題」開催
6月26日	第55回 国立大学図書館協会総会 出展
7月10日	SPARC Japanセミナー 2008 第3回「韓国コンソーシアム事情 - 海外展開を目指して」開催
7月13日～16日	中国化学会 第26回 学術年会 出展
8月17日～19日	第236回 ACS National Meeting (米国化学会秋季大会) 出展
9月 2日～ 3日	SPARC Japanセミナー 2008 第4回「紀要の電子化と周辺の話題」開催 (京都大学数理解析研究所 研究集会との共催)
9月11日～12日	第69回 私立大学図書館協会総会・研究集会 出展
9月16日～19日	第2回 EuCheMS Chemistry Congress (ヨーロッパ化学会議) 出展
9月25日～26日	KESLI 電子情報EXPO (韓国・大田) 発表・出展
10月12日～15日	第15回 国際薬物動態学会北米会議での広報活動
10月14日	Open Access Day SPARC Japanセミナー 2008 第5回「日本における最適なオープンアクセスとは何か?」開催
10月27日～30日	ISAP2008 (International Symposium on Antennas and Propagation) 出展
11月13日～14日	第5回情報プロフェッショナル シンポジウム (INFOPRO2008) プロダクトレビュー 参加
11月17日～18日	SPARC Digital Repositories Meeting 2008 共同主催
11月25日	SPARC Japanセミナー 2008 第6回「IFを越えて-さらなる研究評価の在り方を考える」開催
11月27日	SPARC Japanセミナー 2008 第7回「Open Access Update」開催 (図書館総合展・学術情報オープンサミット2008フォーラム)
12月16日	SPARC Japanセミナー 2008 第8回「日本で使える電子ジャーナルプラットフォーム」開催
12月17日～20日	EUC2008 (International Conference On Embedded and Ubiquitous Computing) 出展
12月24日	第1回 国際学術情報流通基盤整備事業 運営委員会 開催
2009年	
2月13日	SPARC Japanセミナー 2008 第9回「SPARC Japan選定誌がやってきたこと」開催
3月10日	第2回 国際学術情報流通基盤整備事業 運営委員会 開催
3月16日～20日	米国物理学会年会 出展

※ SPARC Japanのサイトで最新のイベント情報を確認できます。(http://www.nii.ac.jp/sparc/event/)